

来年2017年の創立80周年を前に、 全国屈指の進学校をめざして躍進しつつ、 「グローバル&21世紀型」教育へも舵を切った 文・武・芸にアクティブな力を育てる未来派進学校

2003年の新校舎竣工～キャンパス移転と同時に共学化を果たしてから14年目を迎えた市川中学校・高等学校は、来年2017年に創立80周年を迎えます。すでに中学入試の難易度も千葉県内でトップに迫り、今春2016年の大学入試でも東大13名（うち現役8名）をはじめ、国内の難関国公立大学への合格実績を伸ばしつつ、海外大学へものべ22名の合格者を輩出。全国トップレベルの共学進学校をめざして実績を躍進させています。一方ではグローバル教育の充実度でも全国屈指の私学となった市川中学校・高等学校は、来春2017年入試から、1月20日の幕張メッセ入試に「英語（選択）入試」を導入するというニュースも加わり、いま首都圏の中学受験生と保護者から大いに注目される存在となっています。前任の筑波大学附属駒場中・高等学校から2013年に市川中高に赴任し、2014年から校長に着任して同校の教育改革のリーダーシップをとってきた宮崎章先生に今回はお話を伺いました。



校長 宮崎 章先生

市川中学校・高等学校

DATA
1

沿革	1937（昭和12）年	市川中学校開校。第1回入学式を挙（新入生32名）
	1967（昭和42）年	第3校地（現在の本校舎敷地）を取得
	1969（昭和44）年	第1回アメリカ「ホームステイ」実施（1ヶ月間、ミネソタ州）。
	1987（昭和62）年	市川学園創立50周年記念式典を挙
	2003（平成15）年	市川中学校共学化。新校舎竣工・移転。
	2006（平成18）年	市川高等学校共学化
	2007（平成19）年	第三教育塔完成。市川学園創立70周年記念式典を挙
	2009（平成21）年	文部科学省SSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校
	2012（平成24）年	市川学園創立75周年
	2015（平成27）年	校舎併設の「市川学園総合グラウンド」竣工

校長 宮崎 章

所在地 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-38-1

TEL：047-339-2681（代表）

<http://www.ichigaku.ac.jp/>

交通 京成線「鬼越駅」から徒歩20分。JR総武線「本八幡駅」からバス11分。
そのほかJR「市川大野駅」、「西船橋駅」からもバスの便あり

市川中高の多様性とスケールメリットに 筑駒流の自由な授業スタイルを加えた アクティブラーニングを導入

2014年から市川中学校・高等学校の校長に着任した宮崎章先生は、前任の筑波大学附属駒場中高で副校長の任期を終えた2013年に、ご縁があって市川に迎えられたといいます。

「市川と筑駒はともにSSH（スーパーサイエンス・ハイスクール）指定校であったり、国際交流に力を入れていたりという共通点がありますが、男子校の筑駒と共学校になった市川とでは、雰囲気の違いはありますね。市川の生徒はおとなしい面があって、授業も真面目にノートをとって聞くというスタイルが中心で、そこは少し変えてもよいのではないかと感じました。いまアクティブラーニングが教育の課題と言われていますが、筑駒ではかなり以前からそうした授業をしていましたので…」と宮崎先生。

「市川の全校生徒は約2300人いますから、900人弱の筑駒に比べると、同じ中高でも2.5倍の大きな学校という規模の違いがあります。筑駒は小規模な学校だけに、1学年4クラス（中学は3クラス）の授業を各教員はすべて受け持っていました。すべての教科で、教員が生徒全員と授業で接することができ、授業もそれぞれの教員のやり方に任されているので、独自のやり方ができるという利点がありました。

しかし、市川は中学8クラス、高校11～13クラスと規模が大きいので、教員数人で分担しますので、あまり自由なことはできないという面があったようです。ただ逆にいうと、それだけ大きな規模だけに、多様な生徒がいて、いろいろな機会があるという利点もあると思います。



「SSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校として、さまざまな課題に取り組む。



「ALICE マルチルーム」＝アクティブラーニングに適した複数の特別教室が新たに整備された。

筑駒より規模が大きめの灘や開成でも、もっと自由にやっていると思います。この市川中高の生徒の質からすれば、先生方がもっと自由な授業をしてもいいのではと考え、ここ2～3年、いろいろなことをやろうと働きかけてきました」という宮崎先生。

そういう宮崎先生ご自身が、有志の生徒を集めて、MOOC(Massive Open Online Coursesの略)への取り組みなどもしてきたといいます。

「MOOCはインターネット上で誰もが無料で受講できる大規模な開かれた講義のことで、CourseraやedXがその代表です。HarvardやMITや東大の講義が誰でも聴けるようになった画期的なプログラムです。Courseraでの東大の村山斉教授の“From the Big Bang to Dark Energy”という英語での講義を『面白いからやってみない』と生徒に声をかけたら、当時の中3、高1、高2の、いま考えると、それぞれトップクラスの生徒が応じてくれて、2013年から一緒にやってみると、すごく反応も良く、面白がって取り組んでくれました。

また、ちょうど中3がシンガポールの海外修学旅行を始めた年だったので、それならばシンガポールの歴史を英語で勉強してみたらどうかと呼びかけると、40人くらいの中3が集まってくれました。学年の先生方もそれに協力してくれましたので、シンガポールの英語の中学校用教科書を一緒に読むことを始めました。

あくまで『教師である僕が授業するのではなく、君らがやるのだよ』と言って…。それまであまりそういうスタイルの授業を経験していなかった生徒が新鮮に感じ、楽しいと思ってくれたのだと思います」

放課後の特別講座から始まった MOOCへの取り組みが 「LA（リベラルアーツ）ゼミ」に発展

その宮崎先生の特別講座はどういう形で行われてきたのでしょうか。

「当初は放課後の時間帯に始めました。生徒はクラブ活動があったり、いろいろ忙しくて難しい面もあるのですが、放課後の試みは現在もいろいろ続けています。

たとえば、オックスフォードの研修に行く生徒や、あるいは行って帰ってきた生徒に、せっかくそこでモチベーションが高まったのだから、イギリスの歴史を勉強しようよとか、シェイクスピアをやってみないかという、興味を持って集まってくる子たちが増えてきたのです。どちらかという、女子のほうが海外研修やグローバル教育のプログラムには関心が高いですかね。そんな感じで、放課後の時間だと自由のできる、少しずつやってきました。

ただ、やはりもう少し授業のなかに取り入れられないかということで、去年(2015年)からは『LA(リベラルアーツ)ゼミ』という講座を高2で始めました。

市川は『SSH(スーパーサイエンス・ハイスクール)』指定校でもありますので、理系ではさまざまな取り組みをしてきましたが、文系でも何かできないかと考え、文系6クラスのうち授業時間数が多い選抜クラス以外の生徒を対象に、金曜日の2時間、少人数のゼミをやってみたのです。すると生徒たちはすごく面白がって取り組んでくれました」と宮崎先生。

「その『LA(リベラルアーツ)ゼミ』に取り組んでいるのは文系の4クラス全員です。年によって違いますが、今年は140人くらいでしょうか。その140人を半々に分けて、8つの講座を用意すると、ひと講座あたり10名くらいになります。1テーマ10回のゼミを前期・後期のどちらかでひとつ受講し、金曜日の午後、2時間続きで、各8~10名前後のグループで深く掘り下げていきます。そこでは教師の側が一方向的に授業をする通常の講義形式ではなく、英語・社会・芸術分野などのユニークなテーマについて、担当の先生が『こういうテーマでやろうよ』といったものに関して、少人数で、自分たちで意見交換したり、プレゼンをしたりという形でやっています。個々の調べた成果を発表したり、みんなで議論したりすることで、思考力・判

断力・表現力を鍛えることができるのです」

そういう形の学びならば、生徒にとっても楽しみややりがいがあるのではないかと思います。

「生徒は多くが面白がってくれていると思います。従来はそういう楽しさが少し足りなかったかなと…。筑駒では20年くらい前からそうしたゼミ形式の授業をしてきましたが、本校の先生方も慣れば誰でもできるものだと思います」と宮崎先生は考えます。

同校の『学校案内』に紹介されている『LA(リベラルアーツ)ゼミ』のテーマは、生徒にとって面白そうなものが並んでいます。たとえば『TED』というのは、みんなの前でプレゼンをするのでしょうか?

「この講座では、プレゼンの仕方の基本を学び、過去の素晴らしい動画を見たりしながら、やがては市川学園を紹介するプレゼンをやろうと…。もちろん英語です。また私は日本史が専門ですが、ここでは『Big History 講座と一緒に学ぼう!』という講座を持っています。これはビッグバンから始まって、人類が誕生し、歴史が始まり、現在~未来までを学ぶなかで、いろいろな学問を全部つなげて、人間の社会というものを総合して見ていく『コネクティング・ナレッジ』という知識を総合化しようという試みで、世界では多くの高校生が学んでいる手法です。スタートは物理の話から始まり、分子の誕生で化学をやり、生物が出てきて、ようやく人類が出てきたところまでいま進んでいます」と、宮崎先生はご自身の担当講座の説明もしてくれました。

知的好奇心のある生徒には、大いに楽しめそうな講座の内容です。

「参加6名の中に、直前のニュージーランド研修を経験した3名が入っていました。英語をもっと使いたいと思ったのでしょうか。それで少し難しいこの講座にも、手をあげて加わってくれました。さすがに海外の大学の講座を聞くので、難しい単語も出てきますし、慣れていないこともあって大変です。それでも『これは訳さなくても、話の筋がわかればよいのだよ』などとアドバイスしながら進めています」

2016年度LAゼミ 講座一覧

- TED× Ichikawaをやろう!
- ストーリーテラー(語り部)になろう
- D・クリスチャン教授(豪マコーリー大)の Big History 講座と一緒に学ぼう!
- 学びの技術を探求しよう
~スポーツの上達法が勉強にも通ずる~
- 音楽(芸術)家たちの日常
- 商業音楽の社会史 ~日米大衆音楽の詩歌を中心に~
- 映画で見る世界史
- 食から世界を謎解きする Part.2

哲学を通して考えを言語化し、教養と表現力、コミュニケーション力を高める「市川アカデメイア」

こういう、少し難しいけれども楽しい講座ならば、文系選抜クラスの生徒からも受講したいという希望が出てくるように思いますが、どうなのでしょう。

「そういう声も当然あります。それで、もうひとつ以前からやっている高2生を対象とした選択講座『市川

アカデミア』という哲学書を読んで対話を行う放課後の講座で、文系選抜クラスの生徒から、『LAゼミ』の代わりに、そうした形式の授業を受講したいからと応募してくるケースが出てきました。この『市川アカデミア』講座では、哲学、社会科学の古典作品をテキストにして、参加者は自由な対話の構築によって理解と教養を深め、自分の考えを言語化することで、表現力やコミュニケーション力を磨きます。そのうえで講座の終了時には、全員が対話に使用したテキストの一作品を選び、論文を執筆します」と宮崎先生。

「こうした学びは、いま文科省が進めようとしている高大接続改革や、この先の大学入試改革、国立大学の推薦入試を30パーセントまで増やす流れにも全部つながっているわけです。こういう学びをすることが教養の幅を広げ、これから（2020年以降）の新しい大学入試にも対応できる力を育てるものと考えています」と宮崎先生は明言します。

たとえば宮崎先生の前任校の筑駒では、何年くらい前から、そういう授業が行われてきたのでしょうか。

「かなり前からです。教科書通りに教えることはほとんどありません。そのほうが面白いですし、授業でも生徒は行儀よく「ハイ」と言って手を挙げることはせず、その場で思ったことをどんどん発言しています。

私自身も歴史の授業では説明することが多いのですが、やはりそれだけではつまらないのですね。

それで中2の授業で『物語アメリカの歴史』という本を生徒に持たせて、班分けをし、7～8章にまとめられた内容のアメリカ史を、植民地時代から建国、その後の発展までを全員で読み通し、それぞれ自分たちで章ごとに発表することをやらせたことがある。それがよかったと思っています。

こうした自身の経験からも、そういう授業の方が生徒たちも面白がって、積極的に学んでくれたという実感があります」と宮崎先生は振り返ります。

実際に中高の教育現場で、そうした取り組みをしたお話を聞くと、そういう学び方でモチベーションが高



市川学園の象徴ともいえる「第三教育センター（図書館）」。

まれば、生徒は自分で積極的に学ぶことができ、知識は後からでも自ら得ることができるという考え方が実証されているように思えます。

「その通りです。生徒は興味を持てば自分で調べるし、教科書も読むのですよ。それを教科書通りに勉強しなければいけないとか、つまらないものでも大学入試に関わるからやらないといけないと思うと、学ぶことが楽しくなくなってしまいます。それでも生徒自身のモチベーションが保てればいいのですが…」

慣れればどの先生もそういう「生徒が自主的に楽しんで学ぶ」授業ができるということなののでしょうか。

「そう思うのです。本校でももっと広がると期待しています」

校長である宮崎先生がそういう投げかけをすることで、そういう授業を「やってみたい」と考える先生が増えていくのかもしれませんが。

一方では、そういう授業スタイルの良さはわかるけれど、それをしていると大学受験に間に合わないと思う先生がいるという話を聞くことがありますが、その点はどうなのでしょう。

「いままで本校でも、丁寧に『こうやるんだよ』と教えてきた流れがありますから、一気にはそのスタイルを変えにくいとは思いますが、やってみると、そうではない学びも面白いと気づくケースが増えると思います。とくに本校などは相当に高いレベルの生徒たちですから、もっとやらせてあげると伸びるのではないかと思います」と宮崎先生。

急速に進化した海外プログラムが、国内生のチャレンジ精神を育て、海外大学進学者を輩出

つまり宮崎先生は、市川中高の生徒がもっと大きく伸びる可能性を感じているということでしょうか。

「もっと伸びると思います。その意味では、まだもっとないなああと…。たとえば、留学フェローシップの

2016年度アカデミア 講座一覧

- 古典との対話へ ～ Why don't we have a dialogue? ～
- ヘレニズムとヘブライズム ～ 西欧思想の二大源流 ～
- 科学・宗教と人間・社会 ～ 近現代の社会科学 ～
- 意識と実在をめぐって ～ 東洋哲学の精華 ～
- 学問の真理、人間の心理 ～〈探究〉の軌跡～
- Rhetoric in Europe and America
～ 原典との対話へ ～

大学生たちが来てくれて、国内の大学進学とは『別の道もあるんだよ』という話を生徒にしてくれるわけです。これを3回やってきたのですが、当時の高2生で「海外に行こう」と関心を持った生徒が、ついに海外大学への進学を果たしました。

いままでも少しずつはそういう流れがあったのですが、今年は4名がチャレンジして、のべ22校に合格し、これだけ目立って増えています。これまでと比べると、海外にも目が向いてきています。それも、この4名は帰国生ではなく、ずっと国内で生活してきた生徒です。

そのほかにも、英国ケンブリッジ大学やオックスフォード大学での国際研修は今年で5年目を迎えました。ドミトリー（学生寮）で暮らし、大学の先生方や学生から学びの手ほどきを受けます。授業はAll Englishで、英語を学ぶのではなく、英語で学ぶのです。ディスカッションやプレゼンテーションを通じて深い思考法や自己表現を身につけ、ときには街に繰り出して歴史を学びます。ケンブリッジ大学では理系カリキュラム、オックスフォード大学ではシェイクスピアを題材とした文系カリキュラムが用意されています。

さらにカナダ、ニュージーランドへの研修を続けてきましたし、今年はさらに英国のイートンへの短期留学を加えました。いま、こうした海外プログラムに対する関心がとくに高まっていて、いろんなことにチャレンジする子が増えています」と宮崎先生。

「官民協働の海外留学支援制度『トビタテ！ 留学 JAPAN』にも、昨年は本校から3名が派遣され、今年は6名が行く予定です。これは千葉県内の高校では最も多数で、『こういうのがあるけど、やりませんか』というと、40～50名が集まるのです。実際に応募申請できたのは10数名でしたが、そのなかで6名が合格しました。千葉県からは17名合格したうちの6名です。

また『トビタテ！ 留学 JAPAN』の選考には落ちてしまったけれども、そのためにいろいろと準備や努力をしてきた生徒が自費でも5名ほど留学します。それ以外にも各自で海外へのプログラムに応募して10数名が参加しています。つまり学校側が計画～準備や引率をしての留学プログラムには120名以上が参加していますが、それ以外にも、自分ひとりで海外に旅立つ生徒が10数名いるということです。

今年からは、英国イートン校での研修も設けました。もともと本校は、創立者の古賀米吉先生が欧米を視察で回ったときに、イートン校を見て、「ああいう学校を日本に作りたい」と思って創立された私学です。そのイートン校と話がまとまって、今年初めて22名がこの夏に留学します。中3から高2までが19日間、イ-



イギリス海外研修(ケンブリッジ大学・オックスフォード大学)。

トンの寮に泊まります。男子校であるイートンの寮に女子も宿泊できるようにしてくれました」

歴史ある英国のケンブリッジ・オックスフォード両大学やイートン校で学び、アジアの新たな発展の中心ともいわれるシンガポールの活気にも触れられる市川中高の海外プログラムは、保護者の世代から見ても羨ましい体験といえるでしょう。

「SSH」指定校でもある市川中高が、以前から理数系の教育に力を入れてきたことは知られていますが、一方では、最近急速にグローバル教育のプログラムを多岐にわたって導入～実現していることが注目されます。また、同校が確かな手ごたえを感じてきたという帰国生入試は今年で何年になるのでしょうか。

「帰国生は今年2回目の卒業生を送り出しました。今年の帰国生は、外語大やICUや早稲田の国際教養学部など、グローバル系の国内大学にはかなり進学しましたが、海外大学に進学した子はいませんでした。でも、きっと大学時代にみんな海外にも出ると思います。逆に、先ほどの4名のように、日本国内で育ってきた生徒のなかから、海外に巣立っていく生徒が出てきたのは嬉しいことです。

それ以外にも、たとえば順天堂大学医学部の天野篤教授が、医学を志す高校生を手術の現場に入れてくれるという読売新聞社による企画にも、去年も今年も本校から一人、生徒を参加させています。

もちろん、片方では大学受験勉強もして、それをクリアしていかなければいけないのですが、もっと先を見て、自分の人生を考えたときに、高校時代にいろいろなことをやってみようよと働きかけるのが、現在の市川中高の教育の方向です」と宮崎先生は、そのコンセプトと教育姿勢を語ります。

「カリフォルニア大学の大学生を講師に招き、5日間にわたって様々なテーマについて英語でディスカッションを行う『エンパワーメント・プログラム』も今年



「トビタテ! 留学 JAPAN」でスリランカでの医療ボランティアに参加。

カリフォルニア大学の大学生などを講師に招き、5日間さまざまなテーマについて英語でディスカッションする「エンパワーメント・プログラム」。



で3年目となり、今年の夏は高1・高2の希望者91名が参加する見通しです。こちらが海外に行くのではなく、海外から来てくれるプログラムです。

部活で忙しいとか、あるいは費用の面でそういうチャンスがなかった生徒にも、5日間「英語づけ」で、しかし英語の勉強をするのではなく、もっと積極的に自分の将来を考えていこうというプログラムに、1年目は75名、2年目の昨年と3年目の今年は100人近い高1・高2が参加してくれるようになりました。

生徒5～6人のグループに一人、カリフォルニア大学等からの学生が入って、はじめはごちないのですが、大学生が優秀ですから、その姿から学び、彼らから問いかける「Why? (なぜ)」「なぜそう思うの?」という言葉と、これまでなかったという経験に触発されて、最後には5分くらいのスピーチを、みんなの前で堂々とできるようになります。まさにアクティブラーニングですね」と、宮崎先生は、市川中高のプログラムの特色を説明してくれました。

英国オックスブリッジとイートン校等への海外研修でモチベーションを高め、「ALICEプロジェクト」でさらに力を伸ばす!

市川中学校では、来春2017年から中学入試にも選択で「英語入試」を導入しますが、その背景にはどういう理由があったのでしょうか。

「それは帰国生入試の延長でもあります。帰国生入試には海外在住年数や帰国後何年以内といった条件がありますよね。それに漏れてしまう子もいますし、今後は小学校でも英語が教科化します。また、幼少時から英語を熱心に学んでいるが、海外には行っていない子も多くいます。そういう子たちが英語を生かして受験できるチャンスを広げたいという考え方です」

すでに4科目入試でも高いレベルになっている進学校の市川が「英語+国・算2科」の選択入試を新設す

ることで、それなら挑戦してみようという受験生が増えそうです。

「そうですね。ただ、結果的に帰国生が中心になることから、求められる英語レベルはかなり高くなるのではないかと思います」と宮崎先生。

海外研修のプログラムでは、女子の積極性に男子生徒がいい意味で刺激を受けている面もありそうです。

「おっしゃる通りで、やはり女子のほうが海外系のプログラムには全国的にも関心が高いです。だけど男子もそれなりに増えてきているのは、そういう良い刺激もあってのことだと思います。

2003年に共学化して女子が入学してきてから、音楽系の部活がいっそう盛んになりました。たとえば以前から存在したオーケストラ部が、女子が入ってきってから、部員100名以上の人気クラブになりました。ほかにもプラスバンド部や音楽部にも男子が入るようになっていきます」という宮崎先生は、筑駒にはいなかった女子の存在に頼もしさを感じているようです。

市川中高は、教育環境的な側面でも、この数年で新たに多くの設備やプログラムを充実させています。

「1937年にできた学校で、今年で創立79年になります。新たな教育環境や場の充実ということであると、共学化から14年目を迎え、来年には創立80周年を迎えるにあたって、昨年、校舎の隣に新しいグラウンドをつくりました。さらに創立80周年の目玉として、アクティブラーニングの部屋をつくっています。昨年からスタートした『ALICE (= Active Learning for ICHIKAWA Creative Education)』というプロジェクトを実践する部屋です。

実は東京大学も2007年に、アクティブラーニングの部屋KALSを新設しています。先生が教室の前において、生徒はそちらを向いて講義を聞く形式ではない学び方を実践する場が大事という考えによるものです。

たとえば国枝記念ホールも『ALICEホール』と位置



電子黒板機能付き高輝度プロジェクターが2面、生徒一人につき1台のタブレット端末などが整備されている「ALICEマルチルーム」。

づけ、生徒の発表の場として、最新型のプロジェクターを入れて、照明を暗くしなくても良く見えるようにしました。また『マルチルーム』には、電子黒板を入れ、側面にホワイトボードを置いて、タブレットを入れ、LTE回線をつないで、様々な探求や発表などの活動に使えるようにしました。

全部をICT化するわけではなく、生徒は「まなボード」というホワイトボードを使って、意見や考え方をアナログで書き、これを撮影して共有したり発展させたりしていきます。高3、高2でもこの部屋を使いますが、メインは中学生です。こうした教育環境とアクティブラーニングのなかで、自分の考えを表現する“アウトプット型授業”や、互いの意見や物の見方を伝え合う議論を通して、様々な気づきを得て、グループでひとつの課題に向かう協働力を高めることができます」

こうして、宮崎先生が校長に着任以来、市川中高では矢継ぎ早に新たなプログラムを導入してきましたが、さらなる進化をめざしているようです。

「徐々に一方的な授業は少なくなっています。読書感想文を共有したり、地理などでの活用も有効ですね。英語ではデジタル教科書を使ったり、フラッシュカードなどの活用もやりやすくなったようです。こうした授業をする先生のことを、私たちは『エバンジェリスト(アクティブラーニングの伝道師)』と呼んでいます。

授業にはアクティビティが加わりますから、雰囲気明らかに変わり、さらに授業がスピーディになりました。いままではノートをとっていたものでも、パチッと写真に撮ってしまえば済んでしまいます…。実際には、書くことで覚えるという側面もありますから、全部をそうして済ませてよいわけではありませんが、写真に記録して済むこともありますよね」と宮崎先生は明言します。

変わる大学入試と英語4技能の評価を見通し、進学校としての先見性を打ち出し、果敢にチャレンジ！

宮崎先生は、市川中学校の説明会でも、大学入試の変化やアクティブラーニングなど教育の新たな課題についての説明を保護者にしているといいます。

「いや、もう私はそればかり話しています。今春から東大・京大の推薦・特色入試が始まりましたが、最近では国大協(国立大学協会)が、やがて全募集定員の30%を『推薦入試』に振り分けると公表しているように、主だった大学の入試が変わっていくのは明らかですよね。これからの大学入試は、従来の入試で求められた力だけでは事足りません。そうしたことを私は、



2003年の共学化で女子が入学し、大きな盛り上がりを見せるようになった合唱祭。

学校説明会でも保護者にお伝えしています。そして、英語におけるCEFRの「C1」とか「B1」などの基準の話もしています」と宮崎先生。

現実には、英語の4技能についても、文科省では、語学のコミュニケーション能力別レベルを示す国際標準規格として欧米で幅広く導入されつつある『CEFR(=Common European Framework of Reference for Languages)』の基準を明確に示しています。それに対して、市川中高ではCEFRのどのレベルの英語力をめざしているのでしょうか。

「日本全体の目標数字を文科省が出していて、これから「B1」「B2」をめざそうとしています。しかし現状では、まだ残念ながら多くは「A1」「A2」かもしれません。しかし、「B1」「B2」を全員がめざせるようにしていかないといけないと思っています。

ただ本校の現状ではそこまでいっていないのが事実です。それでも生徒はこれだけ海外プログラムに関心があるわけですから、行く前と、モチベーションの高まった帰国後にもっと勉強すれば、英語力はもっと高められると思っています。そうすれば何十万円もかけた留学費用も安いものになると思いますし、保護者の



中3での4泊5日のシンガポール修学旅行が、さまざまな学びのきっかけとなっている。

期待もそこにあると思っています。

調べたところ、各学年の約三分の一が何らかの形で海外に行っています。先の『エンパワーメント・プログラム』も含めると、生徒の約半数がこうした海外プログラムに関心を持っているわけですから、『大学受験があるから』受験対策を優先するべきだということではなく、『こういうプログラムがあるから、大学受験にも対応できますよ』というように変わっていくと思うのですね。

アクティブラーニングは今年から本格的にやり始めたばかりなので、まだその効果が検証できていないのですが、私が来てから『教育研究部』という部署を新設しました。そこに集まった意欲ある教員が『エバンジェリスト（伝道師）』になって自主的に研究会を開き、そこにまた新たな教員が40名くらい参加して学び出すという、良い意味での循環が始まっています。

留学から帰った生徒も「エバンジェリスト」になるというように、先生や生徒が経験したことをシェアしていく流れができているということなのでしょう。

「そうですね。たとえばオーケストラ部のある生徒はすごいですよ。ボランティアのコースでスリランカに行き、いろんな国から来た高校生たちと一緒に過ごす経験を経て、更に医学や薬学への関心が高まり、いま国立大の薬学部をめざしています。一人で海外の環境に飛び込んでいった生徒は大きく変わりますから」

この先「2020年大学入試改革」で各大学の「個別選抜」はどうなっていくのでしょうか。

「国立大学の『個別選抜』は、基本は変わらないか、より論述化が進むのではないかと思います。いまでも国立大の個別選抜の入試問題では、私立大学に見られる重箱の隅をついたような出題はなくなっています。『英語4技能入試』を次々に入れていく例もあります。筑波大学でも医学部の推薦入試では、先ほどのCEFR



市川中高のアクティブラーニングの様子を、パワーポイントを使って見せてくれた校長の宮崎章先生。生徒を見守る目が優しい。

の『C1』レベルの高い英語力が求められます。立教も上智も早稲田も同様になりつつあります。だからこそ、いま市川中高で導入している教育プログラムや活動が、大学受験にもつながるはずなのです。

SSHをやっている理系生徒のなかには、慶應大学のグローバルサイエンスの研究発表で選ばれてシドニーに行くような成果も出しています。その前の年には、やはり慶應のグローバルサイエンスに参加していた生徒がスウェーデンのカロリンスカ研究所に派遣され、その経験を踏まえて、東大の推薦入試に合格しました。

生徒の多様な活動と挑戦に応えるために「ALICEプロジェクト」をさらに進化させ、生徒の大きな可能性の開花をめざす！

もっといろいろなことに挑戦したい、という生徒にとっては、市川中高の海外プログラム・理数プログラムと教育環境は本当に恵まれたものです。

「一方で、本校にはグラウンドもたくさんありますから、部活動も充実しています。行事ももっと生徒中心にしたいという考えから、今年から『生徒行事部』というものを作りました。これは生徒が自主的・主体的に行事を考え、行うためのハブになる部署で、いまの生徒のレベルを考えると、『もっと生徒が自由に活動する場を増やしていけるはず』と考えてのことです」と宮崎先生。

「2300名もの生徒がいますので、先ほどの海外プログラムに関心を持つ生徒もいれば、部活や行事に打ち込む生徒も多いのが本校の特色でもあります。

県のトップレベルで活躍する運動部も多く、高校の野球部はまだ県でトップレベルまではいけませんが、中学生は準優勝しています。いろんな部活で頑張っている生徒がいます。昨日も賞を取るレベルの台湾の高校生がオーケストラの合同コンサートのために来てくれて、本校のオーケストラ部の100名と、二日間一緒になって演奏を披露してくれました。

こうした自主性・能动性・協働性などを求められる場面も、2020年以降の大学入試や、その先の社会で求められる力を育てる機会として、大切にしていきたいと考えています」と宮崎先生。これも市川中高の多様な魅力といえるでしょう。

来年2017年には創立80周年を迎え、この秋からは『ALICE』プロジェクトもいっそう拡充を図るといって市川中学・高等学校。その先見性・先進性と豊かな経験で学園の方向性をリードする宮崎先生が「もっと大きな可能性がある」と信じる同校の生徒の成長を大いに期待したいと思います。